

因果複句文の接続意義に関する中日対照研究（その1） — 「因 \boxtimes 」「から・ので」の用例を対象に一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065868

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



因果複句文の接続意義に関する中日対照研究（その1）

— 「因为」「から・ので」の用例を対象に—

大瀧 幸子

ohtakis2015@gmail.com

[要旨] 本文旨在通过对照研究汉日因果复句，阐明汉日母语者构成复句时所启用的认知能力和语言知识。首先确定具有代表性的关联词和复句的语例，其次依据语气理论和三域理论对汉日例句进行分类，并配对汉日对译例。本文对日语例句假定4个分类标准（ja 事态的原因，jb 行为动作的理由，jc 判断的根据 jd 说话人的发言、态度的根据），对汉语例句假定3个分类标准（ca 行域义，cb 知域义，cc 言域义）。日语例句的分类标准几乎都有显性语言形式相对容易使用，而汉语例句的分类标准受到意合法的影响，其表达形式不明确。本文聚焦方法论，分析的结论在续集中阐述。

[キーワード] 因果関係 接続意義 モダリティ 意合法

1. 本稿の研究目的

本稿では、中国語接続詞「因为」中国語接続副詞「就」と日本語接続助詞（以後、中国語、日本語を略して表記する）「から」、「ので」、「のだから、」が表す因果関係に特化した意義（以後、「因果接続意義」と呼ぶ）を個々に分類し記述する。ついで、その異同は日中両国語の母語話者の「因果関係を捉える視点とその言語表現システム」から生じたもの捉え、認知語用論に基づく統一比較基準をたてて対照し記述する。

2. 本稿でとりあげる言語形式

因果関係を示す日本語の言語形式がどのような語義ネットワークを形成しているかを最初に確認しておく。

意味論研究での共通認識として、一つの意味領域にはそれを表す複数の言語形式の存在を認めるが、そのなかでも母語話者が直観によって類

義関係にあると認める語義ネットワークは各言語体系毎に異なる広がり
と構成を有する。複数言語の同一意味領域（本稿では「因果接続意義」
を扱う）について比較対照研究を行うには、まずその語義ネットワー
クのなかから分析対象とする言語形式を選定し、「過不足のない語義記述」
を行う準備をする必要がある。

因果接続意義の記述そのものが本稿の考察対象ではあるが、まず常識
的に因果関係を表す言語形式として多用されている単語を日本語から列
記する。そしてその語義ネットワークのなかから分析対象としない形式
について、その除外理由を説明する。

具体的に単語の用法を記述するにあたり、本稿では複句文の前分句を
P句とし、複句文の後分句をQ句と表記する。従来の呼称では前者は従
属節、後者は主節に相当する。また、P句Q句それぞれに含まれる形式
Xを「X (P)」「X (Q)」と表記することにする。

2.1 因果接続意義の語義ネットワーク —日本語の場合

先行研究では代表的な接続形式 (P) として接続助詞「から」「ので」
が多くの分析対象とされてきた。本稿でもこの二単語がもっとも広範囲
の用法をもつと認めて分析対象とする。また、「のだから」を、その語
構成を「のだ+から」と解釈したうえで、中国語との文例対照において
特徴的表現（特に「的」）が現れやすい点を考慮して、分析対象とする。

つぎに、その他の形式を本稿で議論の対象としない理由を述べる。

(1) 語構成の主部である形式名詞が、自立語かつ多義語である形式。
「～ために」：Q句の文脈的意義次第で、原因理由のほか目的、受益
者なども表す。「ためにならない」など名詞としての用法も豊富である。

「～せいで」「～おかげで」Q句の意味がP句の表す事態から被害を
被っている、利益を受けているという弁別的意義特徴をもち、意義が限
られている。「私のせいなの?」「誰のおかげなの?」など名詞としての
実質的意味も明白である。P句の意味を独自の名詞的意味の修飾部とす
るゆえに、P句Q句の接続関係に実質的語義を加える形式として本稿の
考察対象から除外する。

(2) 限定を表す副助詞と「に」で構成される形式。

「～だけに」「～ばかりに」等はP句の意味内容について、「他の同類
の意味内容と区別されている」ことを第一義として表す。その他、話し

手によるプラス評価マイナス評価が文脈次第で下されていることも表すゆえに、P句Q句の接続関係に実質的語義を加える形式として本稿の考察対象から除外する。

(3) 形式名詞「もの」「こと」と「だから」を語構成とする形式。

この二つの形式は、原因理由を表す日本語の複文研究において現在定説のひとつになっている2タイプのモダリティ、事態・行為の原因理由と判断・発言態度の根拠（後述 3.1.1 参照）を、一つずつ表す形式として区別されている。「もの」は前者のモダリティと、「こと」は後者のモダリティしか表さない。この2形式は更に、語構成に接続形式（Q）の代表的形式「だから」を含み、その「だから」の意味によって初めて接続形式としてなりたつという点でも、本稿の考察対象からは除外する。

2.2 因果接続意義の語義ネットワーク —中国語の場合

中国語は日本語と異なり、通常の順接複句文（中国語では「承接復句」）の成立にはマークとなる接続助詞を必要としない。P句とQ句の接続関係がノーマークで結ばれるため、複句文の成立要因は従来「意合法」¹⁾という意味レベルの接続方式の存在に仮託されてきた。その言語学的解明は遅々として進まなかったが、語用論、関係性理論、知識管理などのテキスト分析が各国語の複句文研究で進められているのを機に、新たな進展が期待される²⁾。本稿では意合法という中国語に特徴的な複句文構成方法について知見を深めることを意図しつつ、中国語の「因果関係を捉える視点」の考察を進めていく。

2.2.1 接続詞「因为」「由于」

まず接続詞「因为」「由于」をとりあげる。この二つの接続詞の用法の違いを確認し、「由于」を分析対象から除外する理由を述べる。主要な先行研究³⁾が指摘するこの二つの類義語の用法の違いは以下のとおりである。

(1) 「因为」を句頭に含む「因为（P）」は、Q句の後に移動できる。「由于」を句頭に含むP句は、Q句の後に移動できない。ただし、「P句，是因为～」「P句，是由于～」のごとく、ともに判断動詞「是」の目的節を構成する場合がある。目的節の判断内容を述べる意味役割を果たすことを第一義とする文法成分であり、介詞構造として

捉えなおす必要がある。P句との接続意義の現れ方については沈家煊(2003)が、2種類の接続意義があることを指摘している(3.1.2 参照)。

(2)「因为」は、P句の主語とQ句の主語が同じ場合は、P句の句頭にも述語の先頭にも位置しうるが、主語が異なる場合はP句の句頭にのみ位置する。「由于」は述語の先頭に位置することはない。

(3)「因为」「由于」の表す接続的意義はともに接続形式(Q)「所以」の接続的意義と呼応関係を結ぶ。しかし接続形式(Q)のうち、「因此」「因而」は「由于」とのみ呼応する。この違いが生じる原因は「因为」と「因」の音韻重複をさけるためと、書面語の文体に多用される単語グループであるという共通性で説明しうる。また、「因为」「由于」に名詞句のみが後置される場合は、介詞として介詞構造を構成して単文内の一文成分となる。

なお、日本人が間違いやすい中国語として介詞「为了」の用法がよく例にひかれる。「为了」は日本語「ために」の多義のうち、目的・受益者しか表さず、原因・理由の意味は表さない。

上記(1)(2)(3)項目の検討を通じて、本稿では中国語の因果関係の本質を表す接続形式として「因为」のみを分析対象とする。そこで、先行研究での記述に検討を加え、本稿の考察方法を確認しておく。(1)の言語事実は「因为Q句」で構成された複句文であり、「因为P句」が移動して成立した複句文だとは捉えない。そして「由于」には「由于Q句」が存在しないとする。なぜなら、中国語は孤立語として「語順によって文法意義を表す」というア・プリオリな特徴を有し、意味的には時間的原則(PTS)からの拘束も強くうけているからである(2.2.2 参照)。言語形式の移動は発話場面における伝達効果の視点から論じるべき問題であり、本稿では直接の分析対象とする問題ではない。(2)の言語事実は、接続詞の配置の差異が中国語における主題と主語(主格)の同一非同一を区別するマークの一つであることを示すと考えられる。「由于」にはこのマークとなる機能がなく、文法構造の生産力に劣る。上記の二つの考察方法を支持する論考として、邢福义(2002)を引用する。「“由于”句和“因为”句的差异,主要表现在推理一年的不同。“由于”句重在分析原由,强调理据;“因为”句重在说明原因,讲述事实。作为同义说法,“由于”句是“因为”句的强化理据性的形式。」単語の語義に多くの制

限が加われば加わるほど、表示する意味領域は狭まれていき、用法の種類がそれに伴い減少していくのは意味論と文法論に跨る原則である。

「由于」の用法が「因为」の用法より明らかに少ないという言語事実もこの原則に一致する。

2. 2. 2 接続副詞「就」

本稿では「就Q句」も分析対象にとりあげる。その理由は次の2点である。(1)「就」が配置されるのは常にP句の存在(言語形式化されていない場合も、文脈場面がその意味が表している)を前提とするQ句内である。他の接続形式と共起しなくともP句Q句の意合によって単独で「承接复句, 推断因果复句, 假设复句, 时间复句」(刘月华 et al. 2013, p888)という複句文を構成するとされる。「就」が多様な接続関係を表現すると解釈されてきた言語事実は接続意義の分析資料として注目に値する。すなわち、「就」そのものの語義が極めて単純で内部の語義的特徴が少ないために、個々の文例の背景にあるP句とQ句を関連づける意合法の実態を観察しやすいと予想されるからである。(2)日本語の接続助詞「から」「ので」が中国語ではほとんど訳出されないのと同様、「就」も日本語ではほとんど訳出されない。日本語を原文とした場合と中国語を原文とした場合を比較すれば、因果関係をとらえる視点のうち、どの角度からどこに焦点をおいて言語形式化するかを考察するのに有用な用例が集められる。

またここで「就」の多義構造について概観しておく。本稿ではその典型的語義を「言語形式の配列に時間原則(通称PTS)⁴⁾が存在していること、をとりたてる」と仮定する。この典型的語義は「事態を生起する順序どおりにとらえるという、シンプル過ぎて通常は言語化されない認知的判断を、あえて言語形式としてマークする」とも言い換えることができる。PTSが時間領域で発揮されれば<すみやかに>の意味となり、空間領域では<すぐ近くに>、出来事の流れでは<順調に>となり、文脈によって多くの対事的認識を表現することになる。複句文の接続意義に関しても、「話し手が出来事を認識している認知領域において<出来事が変化していく時間的順序>の再確認を行った」ために生じた周辺の意義(派生義)と位置付ける。この多義構造の分析は具体的用例を考察するなかで詳説する。

3. 因果接続意義の比較基準の設定と用例分析の作業手順

複数言語に対する比較対照研究でもっとも重要な原則は、「唯一かつ理論的に一貫した文法的または意味論的基準をたて、その基準に基づき比較分析を行う」ということである。

しかし、両国語の接続表現の比較にはいる前段階となる資料整理を始めると、双方の接続形式が互いに対訳のなかで訳出されない（言葉をつくさねば訳出できない、または形式の欠如によりその差異を無視される）確率が極めて高いことが一目瞭然となる。そこで、どういう文例を対照分析の資料とするべきかを定める手順が必要となる。

本稿ではこれまでの日中両国における先行研究の進展を鑑み、最終的な比較基準をたてる準備段階として、両国語にできるだけ共通しうる分類基準をたてて文例の接続意義を考察する。具体的作業手順は以下のとおりである。（1）最初に因果接続意義に対して、日本語と中国語の文例に別個の作業用分類基準をたてる。（2）次に原文の接続形式に対して、翻訳文のなかに明らかに符号する接続形式が見いだせる文例のペア（以後、「パラレル用例」と呼ぶ）を第一次分析資料として選ぶ。中国語を原文とする用例と日本語を原文とする用例の2種類を集める。（3）パラレル用例として非成立であった文例のペア（以後、「非パラレル用例」と呼ぶ）を第二次分析資料とする。これも原文と翻訳文の組み合わせを2種類つくる。（4）最後に、（2）（3）において当初の分類基準にあてはまる文例がどのように分布しているかをそれぞれ集計する。

3.1 分類基準の定め方と使用法

本稿では分類基準を選定する理論的支柱をモダリティ論に求める。

日本語モダリティについての先行研究は視点、手法ともに多岐にわたるが、代表的な3タイプ⁹⁾が認められる。一つは山田孝雄に端を発する陳述論を発展させ、日本語教育現場で利用できるほど記述的成熟をみせている流れであり、一つは外国語学で従来ムード（法）として考察されてきた諸形式への知見を活用しつつモダリティの文法概念としての普遍性を追求する流れであり、三つめは文を超えた談話テキストの単位のなかで主に知識管理、主観性、グランディングなどの視点からモダリティを論じる流れである。本稿では考察を進めるに際して参考の便をはかる

ため、それぞれの流れを、「モダリティ論A」「モダリティ論B」「モダリティ論C」と名付けておく。

また、本稿では「原文と翻訳文」を一つの用例として収集して分析対象にするにあたり、用例に対して次の条件を課す。

「その用例は、原文1に対し複数の翻訳文がペアになった用例群の一つでなければならない」

この条件を備える用例のみを扱う理由は3点ある。(1) 一つの原文(単文、複句文、連文、文章すべてを指すものとする)に対して、複数の翻訳者が複数の訳文を作り出すことは翻訳文化の世界で公認されてきている。「異なる読み」を認めることは、某言語 α の文脈の意味が某言語 Ω では複数の文脈の意味として通用すると認めることである。用例を言語分析の対象とする場合、つねにその「複数の文脈理解の可能性」を射程に置いて考察するべきである。翻訳者の文体の個性まで考察可能となり、テキスト分析に活用できる有用な言語資料が作成できる。(2) 上質な翻訳文とは何かについて近年、従来の修辞学的検討を超えた理論的考察が始まっている⁹⁾。翻訳活動は文化的背景への百科事典的知識が必要とされ、文化の輸入輸出をも可能にする精神活動としての考察は、複数の翻訳者を分析の射程に入れることで効果的に分析できるようになる。(3) 言語形式だけを対象として用例をみるならば非パラレル用例であるにもかかわらず、「意識」として翻訳の成立が認められることが多い。むしろ「意識」が翻訳の常道といえるほどであるが、その成立する限界、誤訳拙訳と評価して破棄される基準はどう設定するべきであろうか? 「翻訳の成立限界」を考案するためには、やはり1つの原文に対する複数の翻訳文を考察することから始めねばならない。言語学分野で近年認知語用論として発展してきた関連性理論¹⁰⁾は、「翻訳者が原作者と同じ現象を自らの視点から認識しようとする」メカニズムについても、やがてその成否を論じることが期待できる。

一方、語学研究者の翻訳文の取り扱い、原文が含意する文化的背景や両言語間の言語体系の異同が捨象され、一律に翻訳文例数をカウントするために用いられがちであった。そのため、厳格な外国語学者は翻訳文を「母国語で考えて目標言語を分析しがちな言語資料」「存在しない特徴まで見出しがちな言語資料」とみなし、言語分析の対象として等閑

視してきた。しかし本稿では、言語学的対照研究及び言語表現の成立過程を考察するために有効な言語資料として翻訳文を重要視する。

3. 1. 1 因果接続意義の分類基準 —日本語の場合

本稿では日本語文例を作業用に分類する基準として、モダリティ論Aに属する蓮沼等(2001)⁸⁾が提示するところの4分類(ja jb jc jd)を採用する。この著作は日本語教育の現場で使用可能なテキストとして客観的割り切り方を示すので、作業者間の判断にばらつきが生じにくい。

この4分類の区別は原則Q句の文末形式で明示される。また ja jb と jc jd の2分類ごとに共通する特徴が認められ、前者は「事態・行為の原因理由」後者は「判断・発言態度の根拠」としてまとめられる。

[日本語・表1]原因・理由の表現(まとめ6 : p142)

- ja 事態の原因
- jb 行為の理由
- jc 判断の根拠
- jd 発言・態度の根拠

典型的文例

- ① ここは海に近い | から・ので |、風が強い。
- ② 少し熱がある | から・ので |、お風呂に入るのはやめておこう。
- ③ 星が出ている | から・ので |、明日もいい天気になるだろう。
- ④ 危険 | から・ので |、エスカレーターでは遊ばないでください。

また、蓮沼等(2001)では、⑤「理由を表さない | から・ので |」として、次のような文例を排除している。

- ⑤-1 すぐにもどってきます | から・ので |、ここで待っていてください。
- ⑤-2 これから教科書を読みますよく聞いてください。
- ⑤-3 金メダルでなくてもいいから、せめて入賞だけでもしてほしい。

この分類は、④発言・態度の根拠と区別するために「XがYの実行を促進する情報を表す場合」(注 : X=P句の表す事態、Y=Q句の表す未実現の行為であり、多くは聞き手もその一端をになう)とされている。

なお、「から」「ので」にも「からP句」「のでP句」がQ句の後方へ移動したようにみえる用法がある。①②③④⑤の文例全てでP句は移動可能である。しかし蓮沼等(2001)は、文末の「から・ので」を語順の変

化により「典型的語義の接続意義を変化させた派生義」を表す形式としては扱わない。単語内の多義構造を分析するより、終助詞「から・ので」の用法として別個の単語として次のように意味記述を行う。

「聞き手の理解や行動を促す場合に使われ、会話をスムーズに進める効果をもつ。話し手と聞き手が対立している場合は、「よく覚えておけ」といった、脅しの意味をもつ。この場合は必ずカラが使われる。」

同様に、語順で文法構造・意味が決定される中国語においても“了”が動詞直後に位置する場合はアスペクト助詞、文末に位置する場合は語気助詞として別単語に扱われる。その語義の違いは「事態めあてのモダリティ」と「発話・伝達のモダリティ」の区別⁹⁾として解釈可能であり、本稿が分析対象としている“因为”の用法についても安直に「因为P句がQ句の後へ移動した文例として扱うことはできない。

また、「のだから(P)」は、蓮沼等(2001) p.129-134 で語義と用法について次のように解釈されている。(抄訳)。

「X(注:P句が表す情報)を確かな事実として提示し、それが確かな事実だということから判断すれば、当然にY(注:Q句があらわす判断、評価、希望、意思、命令、勧め等)が成り立つということを述べる場合に用いられる。」「Xが聞き手にとり既知で、かつ本人に関する情報である場合は、Q句で聞き手に対しての行動・認識要求が表される」

上記の解釈をみると、「のだから」が「判断・発言態度の根拠」を示す形式に分類されていることがわかる。本稿の用例分析が、従来、日中対照研究でしばしば課題にとりあげられてきた「のだ構文」と「是～的構文」の類似性と差異¹⁰⁾に対して、新しい視点からの考察を提供することが期待される。

3. 1. 2 因果接続意義の分類基準 —中国語の場合

中国語文例に対して作業用の分類基準をたてるために、まず中国語のモダリティ(“语气”)を考察した先行研究¹¹⁾を参照する。

井上優(2012)は日本語学者の視点から「実在感」という独特のモダリティ(的)要素を認める。「文法カテゴリーとしてテンスを持たない中国語には、対事的モダリティとも対人的モダリティとも質的に異なるものであるが、叙述のリアリティを獲得しようとする「話し手の心的態度」を表す表現が必要とされている。」(抄訳) 一例として、“明天会下雨”

“明天会下雨的”を対比し、「“的”を用いると、雨が降る可能性があるという判断が話し手の内部で実感として存在することを述べる表現となる」としている。この論考は概ね、モダリティ論(C)と通ずる見解と捉えられる。また、話し手の語り方すべてを考察対象とする視点は、中国語の意合法の解明へ有益な知見をうみだす可能性がある。

沈家煊(2003)では中国語文例の意義内容に「“行”“知”“言”」の三つの概念領域を設定する。「“行, 知, 言” 三域在 Sweetser (1990) 里分别是 content, epistemic modality, speech acts 三个层次。“行”指行为、行状, “知”指知识、认识, “言”指言语、言说。」(要約)とし、接続詞“因为”を用いた次の文例をあげている。

- ① 张刚回来了, 因为他还爱小丽。[行域]
- ② 张刚还爱小丽, 因为他回来了。[知域]
- ③ 晚上还开会吗? 因为礼堂里有电影。[言域]

各文例の解釈は以下のとおりである(筆者による意識)。

① 張剛が麗さんを愛しているなら当然戻ってくるという、行為が依拠すべき規則によって成立した出来事上の因果関係を表す。

② 一見①の因果関係を逆にしたようにみえるがそうではない。話し手が張剛の帰ってきたことを知って、彼がまだ麗さんを愛していると結論づけたことを表す。推理されることで成立する因果関係である。

③ P句が質問という言語行動を表し、Q句は間接的に質問理由を述べる関係にあり、①②とは大きく異なる接続意義を表している。ただし、この文例に限っていえば、この接続意義は日本語での分類のように因果関係とは異なるもの(3. 1. 1⑤因果関係を表さないカラ・ノデの用法参照)として整理した方がよいと思われる。

Sweetser (1990)の澤田治美訳(2000)では「[行域]を「現実世界(内容)領域」、[知域]を「認識領域」、[言域]を「言語行為(会話)領域」と訳している。この訳語からも推測されるように、この理論上の分類は概ね、本稿が日本語文例の作業用分類基準とした四分類と重なる概念といえる。しかし、中国語の句音調、文音調の分析¹²⁾が遅々として進まない現在の時点では、中国語の因果接続意義の区別を分類する明確なマークを見いだせない。沈家煊(2003)が提示した三領域の言語形式上の区別をつける方法は、変換方式の成否である。

変換先の構造：P句是因为Q句

この変換が可能なのは「[知域]を表す文例のみと報告している。:

张刚回来了是因为他还爱小丽。

英語においても、「現実世界（内容）領域」の文例だけが、「because」の前にカンマ区切りをいれずに単文として表記できると指摘している。

以上、明確な言語形式をマークとしえない不備よりも、日本語モダリティ論と一部相通じる概念の存在を重視し、本稿では作業用分類基準として上記の三領域を設定する。分類名は「行域義」をca, 「知域義」をcb, 「言域義」をcc, とする。中国語の複句文を意味により分類することは、「意合法の分類試案」とみなしてもよいであろう。

4. 今後の課題

紙幅の都合により、本稿は研究目的を果たすための理論的基礎を記述するに終わった。筆者は「(その2) 中日因果複句文の用例分布」「(その3) 因果接続意義を決定する認知活動」へと続稿を期している。三部まで公表完了の暁には、改めて諸兄姉からのご批評ご指導を仰ぎたい。

〈注〉

- 1) 張黎(2001)に学説の流れが要領よくまとめられている。
- 2) 田村早苗(2013)参照。
- 3) 陆俭明, 马真(1985), 杨庆慧主编(1993), 刘月华, 潘文娱, 故鞞(2001)参照。
- 4) 「構文単位間の相対的な語順は、概念世界で表す状態の時間的順序によって決定される」(言語における時間順序原則 (The principle of Temporal sequence) 略称「PTS」) この、意味伝達活動においてもっとも負担の少ない順接続表現は多くの言語で言語形式化されない「ノーマークの意味」となる。中国語を対象としてPTSを論じた古典的論考は、James H-Y. Tai (1985) 参照。
- 5) 3タイプのモダリティ論についての近年発表された主な概説書。
モダリティ論A: 森山卓郎 et al(2000), 日本語記述文法研究会(2003)(2008)
モダリティ論B: 澤田治美編(2012)(2014)
モダリティ論C: 坂原茂編(2000), 田窪行則(2010)
- 6) 柳父章(1978)(1982)(2017)参照。

- 7) 関連性理論を概観できる簡潔な紹介文として、下記のレクチャーは出色である。
 人工知能学会誌 2003 (18 巻 5 号) 「AI 研究者が学ぶ言語学の新展開」〔第 2 回〕
 松井智子「関連性理論—認知語用論の射程」
- 8) 蓮沼昭子・有田節子・前田直子 2001『条件表現 (日本語文法セルフマスターシリーズ 7)』くろしお出版
 ここで示された 4 分類は中国語文例を扱うのにも効果を発揮する。
 李光赫, 邹善军, 汤明显 2015『日中対照から見る原因・理由文の諸相』風詠社
- 9) モダリティの分類名は研究者によって異なる。この呼称は下記の文献に拠る
 仁田義雄「日本語モダリティの分類」『澤田治美(2014)』63 - 83 頁
- 10) 「のだ」構文の代表的研究：野田晴美(1997)益岡隆志(2007)名嶋義直(2007)
 「是～的」構文の代表的研究：小野秀樹(2001) 木村英樹(2002)
 「のだ」「是～的」の対照研究：范碧琳(2011)(2015)杉村博文(1982)
- 11) 張勤ほか訳(2009), 井上優(2012), 沈家煊(2003)参照。
- 12) 音声分析プログラムを用いた句音調の研究は管見の限りでは他にない。
 陳会林 2022.《汉语偏正复句意合现象的语用学研究》东北师范大学出版社

〈参考文献〉

- 田村早苗 2013. 『認識視点と因果』東京：くろしお出版
- 森山卓郎・仁田義雄・工藤浩 2000. 『モダリティ』日本語の文法 3 岩波書店
- 日本語記述文法研究会 2003. 『現代日本語文法 4：第 8 部モダリティ』くろしお出版
- 日本語記述文法研究会 2008. 『現代日本語文法 6：第 11 部複文』くろしお出版
- 澤田治美編 2012. 『モダリティⅡ：事例研究』ひつじ意味論講座 4 ひつじ書房
- 澤田治美編 2014. 『モダリティⅠ：理論と方法』ひつじ意味論講座 3 ひつじ書房
- 坂原茂編 2000. 『認知言語学の発展』ひつじ書房
- 田窪行則 2010. 『日本語の構造：推論と知識管理』くろしお出版
- 柳父章 2003. (1973 の新装版) 『翻訳とはなにかー日本語と翻訳文化』
- 柳父章 1982. 『翻訳語成立事情』岩波新書黄版(186)
- 柳父章 2017. 『近代日本語の思想 (新装版)：翻訳文体成立事情』法政大学出版局
- 野田春美 1997. 『「のだ」の機能』くろしお出版
- 田野村忠温 1993. 「「のだ」の機能」『日本語学』12-11, 34-42 頁

- 国広哲弥 1992. 「『のだ』から『のに』・『ので』へ」—『の』の共通性」カッペン
ブッシュ・寛子他編『日本語と日本語教育』名古屋大学出版会, 17-34 頁
- 奥田靖雄 1990. 「説明(その1)—のだ, のである, のです」『ことばの科学4』むぎ
書房, 172-216 頁
- 益岡隆志 2007. 『日本語モダリティ探求』くろしお出版
- 名嶋義直 2007. 『ノダの意味・機能—関連性理論の観点から—』くろしお出版
- 范碧琳 2015. 「文末の「のだ」の意味に関する認知言語学的・語用論的研究：文
末の「ものだ」との対照を中心に」, 博士学位論文, 九州大学
- 范碧琳 2011. 「『のだ』の意味と用法に関する研究：中国語との対照を通して」比
較社会文化研究(30), 93-107 頁, 九州大学大学院比較社会文化学府
- 小野秀樹 2001. 「“的”の「モノ化」機能—「照応と“是……的”文をめぐる」
『現代中国語研究』第3期, 146-158 頁
- 杉村博文 1982. 「“是……的”—中国語の「のだ」の文—」寺村秀夫他(編)『講座日本語
学12：外国語との対照Ⅲ』, 明治書院, 155-172 頁
- 木村英樹 2002. 「“的”の機能拡張—事物限定から動作限定へ」『現代中国語研究』
第4期, 1-13 頁
- 藤濤文子, モナ・バーカー他 2017. 『翻訳研究のキーワード』研究社(原作：
Routledge Encyclopedia of Translation Studies, 2nd edition (2009) 第一部)
- 藤濤文子 2007. 『翻訳行為と異文化間コミュニケーション—機能主義的翻訳理論の
諸相』大阪：松籟社(蒋芳婧, 孙若圣, 余倩菲译 2017 《翻译行为与跨文化
交际》南开大学出版社)
- 張勤ほか訳 2009. 『語気詞と語気』于康, 張勤編『中国語源学情報1』好文出版
- 井上優 2012. 「モダリティの対照研究」澤田治美編『モダリティⅡ：事例研究』
195-213 頁
- 沈家煊 2003. <复句三域“行, 知, 言”>《中国语文》第3期 195- 203 頁
- Sweetser, Eve 1990. *From Etymology to Pragmatics: Metaphorical and Cultural
Aspects of Semantic Structure*. Cambridge : Cambridge University Press. (澤田
治美訳 2000. 『認知意味論の展開—語源学から語用論まで』研究社)
- 陆俊明, 马真 1985. 《现代汉语虚词散论》北京大学出版社
- 杨庆慧主编 1993. 《现代汉语正误辞典》北京师范大学出版社
- 刘月华, 潘文娉, 故韡 2001. 《实用现代汉语语法(增订版)》北京; 商务印书馆
- 張黎 2001. 『漢語意合語法學概要』東京：中国書店

- 邢福义 2002. <“由于”句的语义偏向辨>《中国语文》第4期; 337—342 頁
- James H-Y. Tai 1985. *Temporal Sequence and Chinese Word Order*: edited by Jhone Haiman *ICONTY IN SYNTAX* pp49-72: Typological Studies in Language 6
- Grice, P. 1989. *Studies in the Way of Words*, Harvard University Press
(翻譯: 清塚邦彦 1998. 『論理と会話』 toukyou : 勁草書房)
- Sperber, D. and Wilson, D. 1995. *Relevance Theory: Communication and Cognition*, Second Edition, Blackwell
(翻譯: 内田聖二 et al 2000. 関連性理論<第2版>—伝達と認知, 研究社出版)